



計画的に実行された 宇都宮空襲

宇都宮市文化財保護審議会委員 大嶽 浩良

平和への希求と犠牲者への鎮魂を込めて

太平洋戦争下における栃木県への空襲は、昭和17(1942)年4月18日、当時の国鉄西那須野駅付近が被害を受けた、いわゆる「ドゥーリットル空襲」を端緒とし、戦争末期となる昭和20年にはその数は増えていった。中でも同年7月12日深夜、米軍の主要爆撃機B-29による宇都宮空襲は、県内空襲で最も被害が多く、死者620人以上、負傷者1,128人を出した。宇都宮空襲とは、どのような空襲だったのだろうか？

米軍資料による 宇都宮の位置付け

米軍資料「第二〇航空軍司令部経過報告」によれば、リストアップした都市空襲目的地リスト一八〇のうち、宇都宮市は55番になっていた。一番はもちろん、東京市であった(表1参照)。

「作戦任務報告書第二六三三号」(昭和20(1945)年7月12日、写真1)には、宇都宮市は東京から96キロに位置し、京浜地域を除けば関東平野最大の都市で、昭和15(1940)年当時の人口は87,868人であり、人口10万人未満の都市中、最大

級の規模である。さらに宇都宮市の重要性は、東京を取り巻く防衛施設の一つであることと、中島飛行機工場群の連結役であることを指摘していた。さらに米軍は、京浜地域の防空と日本の新鋭機の生産、組み立てに深刻な打撃を与えるために、宇都宮市の軍施設や軍需工場を破壊することが必要だとしていた。

7月12日の宇都宮空襲

米軍資料によれば、マリアナ諸島ティニア島を飛び立ったB-29は全部で560機で、宇都宮・一宮・敦賀・宇和島の4都市

と川崎の石油精製所を攻撃する計画の下、宇都宮を空襲するため出撃した機数は133機、故障等で帰還した10数機を除くと、実際の機数は115機であった。

基地を飛び立った時刻は、12日16時5分(日本時間)、宇都宮上空に到着した時刻は、同日23時19分、基地帰還時刻13日6時36分、所要時間は全部で15時間を超す長い爆撃行であった。

飛行ルートは、出発後、西北に方向をとり、硫黄島上空で進路を真北に転じ、水

戸北方の那珂川河口を陸地侵入点とした。23時19分に開始された空襲は、終了が翌日1時39分で約2時間20分であった。最初に来襲した米軍機は、大きな破壊力を伴うM47焼夷爆弾を投下した。目標地域の中央に大火災を引き起こさせ、後続の米軍機に目印を与えるためであった。この焼夷弾は6個ずつ束ねて投下され、油脂を発火させて周囲を焼き尽くす効果があり、爆風による破壊効果も兼ね備えている。投下されたM47の総数は10,500

表1 米軍がリストアップした中小都市空襲目標地リスト (「うつのみやの空襲」より一部抜粋)

順位	市町村名	都道府県名	人口	順位	市町村名	都道府県名	人口
1	東京市	東京都	6,778,804	33	豊橋市	愛知県	142,716
2	大阪市	大阪府	3,252,340	34	門司市	福岡県	138,997
3	名古屋市	愛知県	1,328,084	35	布施市	大阪府	134,724
4	京都市	京都府	1,089,726	36	富山市	富山県	127,859
5	横浜市	神奈川県	968,091	37	徳島市	徳島県	119,581
6	神戸市	兵庫県	967,234	38	松山市	愛媛県	117,534
7	広島市	広島県	343,968	39	西宮市	兵庫県	103,774
8	福岡市	福岡県	306,763	40	高松市	香川県	111,207
9	川崎市	神奈川県	300,777	41	室蘭市	北海道	107,628
10	呉市	広島県	238,195	42	高知市	高知県	106,644
11	八幡市	福岡県	261,309	43	姫路市	兵庫県	104,259
12	長崎市	長崎県	252,630	44	四日市市	三重県	63,732
13	仙台市	宮城県	223,630	45	甲府市	山梨県	102,419
14	札幌市	北海道	206,103	46	宇部市	山口県	100,680
15	静岡市	静岡県	212,198	47	青森市	青森県	99,065
16	熊本市	熊本県	194,139	48	福井市	福井県	94,595
17	佐世保市	長崎県	205,989	49	川口市	埼玉県	97,115
18	函館市	北海道	203,862	50	秋田市	秋田県	61,791
19	下関市	山口県	196,022	51	千葉市	千葉県	92,061
20	和歌山市	和歌山県	195,203	52	盛岡市	岩手県	79,478
21	横須賀市	神奈川県	193,358	53	久留米市	福岡県	89,490
22	鹿児島市	鹿児島県	190,257	54	若松市	福岡県	88,901
23	金沢市	石川県	186,297	55	宇都宮市	栃木県	87,868
24	堺市	大阪府	182,147	56	旭川市	北海道	87,514
25	尼崎市	兵庫県	181,011	57	前橋市	群馬県	86,997
26	小倉市	福岡県	173,639	58	桐生市	群馬県	86,086
27	大牟田市	福岡県	124,266	59	戸田市	福岡県	84,260
28	岐阜市	岐阜県	172,340	60	岡崎市	愛知県	84,073
29	浜松市	静岡県	166,346				
30	小樽市	北海道	164,282				
31	岡山市	岡山県	163,552				
32	新潟市	新潟県	150,903				

7月11日以前に都市空襲を受けたところ
7月13日以後に都市空襲を受けたところ
都市空襲を受けなかったところ

個、重量は362トンであった。M47を投下したB29以外の機は、E46集束焼夷弾を投下した。この焼夷弾は、木造家屋が密集した日本の都市攻撃用に開発された焼夷弾であり、投下された1個の親爆弾が一定の高度に達すると38個の小型弾に分散して落下する親子焼夷弾であった。落下時、この小型弾のリボンが風を切る音が不気味な印象を市民に焼き付けた。投下されたE46焼夷弾は2,204個、440・8トンであった。

集束焼夷弾を小型弾M69の個数に換算すると、総数10万個の焼夷弾が投下された。この数は当時の宇都宮市の人口にほぼ相当し、1人当たり1個以上の焼夷弾が投下されたことになる。なお、夜間空襲に際して米軍は、地上の施設や状況をはっきりと映し出すために、照明弾15個を使用した。空襲時、市民が異様な明るさを感じたのはこのためであった。密度の濃い各種焼夷弾の投下は、多くの市民に焼死・窒息死をもたらすとともに、



写真1 宇都宮空襲が記録されている米軍資料「第21爆撃軍団作戦任務報告書(第263-267号)」(国立国会図書館憲政資料室蔵、原所蔵:米国立公文書館)



終戦2カ月後の昭和20年10月20日に米軍が撮影した県庁前付近(個人蔵)

表2 昭和20年栃木県内空襲における死傷者および被災戸数(下野新聞で見る昭和・平成史1より転載。一部修正)

市・郡	町・村	日付	死者(名)	負傷者(名)	全壊家屋(戸)	備考
足利郡	御厨町百頭	2月10日	33	100以上		中島飛行機太田製作所空爆の余波
宇都宮市		2月17日			2	空中戦で日本軍1機の墜落による
那須郡	烏山町・境村	7月7日	1		8	
足利郡	毛野村川崎	7月10日	3	3		
河内郡	横川村	7月10日	4		3	
河内郡	姿川村	7月10日	1			日光線鶴田駅構内で
塩谷郡	阿久津村	7月10日	4	2		宝積寺駅
那須郡	芦野町	7月10日	4		3	芦野町中心部
宇都宮市	市街地	7月12日	620以上	1,128	10,668*	宇都宮大空襲
上都賀郡	鹿沼町	7月12日	9	18	256	
芳賀郡	真岡町	7月12日	1		50	芳賀病院～県立真岡中学校付近
宇都宮市	宇都宮駅周辺	7月28日	30以上			
下都賀郡	国分寺村	7月28日	32	70以上		小金井駅
宇都宮市	市街地	7月30日	12	多数		栃木師範学校ほか
塩谷郡	阿久津村	7月30日	4	4	2	宝積寺駅、阿久津村舎
塩谷郡	氏家町	7月30日		数名		県立氏家高等女学校付近
下都賀郡	小山町	8月4日	3	4～5		水戸線小山駅
宇都宮市	雀宮村・横川村・姿川村	8月13日	8			宇都宮南飛行場ほか
那須郡	金田村	8月13日	1		4	中島飛行機大田原分工場を襲撃
那須郡	那須村	8月13日	1			立岩地区
足利市	本城	8月14日	6	若干	9	
合計			777以上	およそ1,330以上	およそ11,000	*市町村名は、昭和20年当時のもの

損害評価報告書の作成
米軍は損害の実態について判定する場合、爆撃前後に撮影した航空写真を作戦任務の計画者が精査し、重要地域に線を引くこと

また、市街地から遠く離れた地域にも、無作為な焼夷弾爆撃が行われたところが多い。東は清原の竹下から西は射撃場(現・駒生球場)周辺まで、被害の出た地域は旧市内の範囲を越えて広く分布した。さらに、市街地を効率的に、徹底して破壊しようとした米軍の意図からは、とうてい理解できないような場所にも焼夷弾が落下していたことが判明した。遠く真岡町や鹿沼町、県北、県外にも広く被害が及んだ事例が存在する。

多くの、省線宇都宮駅東方の水田地帯などにも無作為に落下している。これに対し、市街地西部の被害は比較的わずかであった。
地元の記録では、最初に攻撃を受けた地域は、省線宇都宮駅や今泉町・今泉新田村付近とする報告もある(「宇都宮戦災復興誌」)。しかし、爆撃中心点に予定された中央国民学校や、当時の市役所周辺も激しい焼夷弾攻撃を受けた地域であった。最初に攻撃を受けたか否かは別にして、市街中心地域は徹底的な破壊の対象から免れることは出来なかった。

で破壊状況を示すという方法を探った。計画者がこの手順に従い、目標地域の損害状況、破壊率が十分であると判断した場合、これを目標一覧から削除した。反対に損害が不十分であれば再度、爆撃を実施することになっていた。このような損害状況については、都市ごとに「損害評価報告書」という文書にまとめられている。

同報告書によると、7月12日の報告内容は、空襲の約2カ月前の昭和20(1945)年5月7日と、空襲後の7月27日に撮影した航空写真に基づいていることがわかる。被害面積は約1.5平方キロで、目標とされた人家密集地域の総面積が約4.4平方キロであるから破壊率は34.2%とされている。人家密集地域の実に3分の1強が破壊された計算である。ここでいう「人家密集地域」とは、現在の中央小学校から半径約1.2キロ以内の地域を指しているが、この目標地域内で被害のあった代表的なものとして、宇都宮駅(破壊率40%)、操車場と貨物駅(同20%)、下野製紙・専売局(ともに100%)が挙げられている。東武宇都宮駅と専売局の煙草倉庫も言及されているが、顕著な損害はないと記録されている。
宇都宮空襲は、米軍が軍事拠点を狙い日本の戦争継続能力を直接的に奪うのではなく、焼夷弾で工場労働者等、都市住民の住宅を破壊し、生活基盤を絶つという作戦に既に移行していたことを意味している。こうして、米軍側にとっての7月12日の空襲は二応の成功を収め、宇都宮の人家密集地域は、目標一覧から消えたのである。

の基盤である市民生活に打撃を与え、住民の戦意をくじくことを意図していたのである。
市街地の真ん中に爆撃中心点が設定されたことは、宇都宮の都市部を最も効率的に破壊させ、住民の生命・財産を最大限失わせることを意味する。米軍の最も効率的な空襲とは、一番確実な方法で、最大多数の焼夷弾を市民の頭上に集中させることであった。

計画と空襲の実相

空襲の実相は必ずしも予定通りにはなかった。当夜の悪天候や気象条件などが、予定した空襲のシナリオを狂わせたのである。

宇都宮上空に達した1番機の投下焼夷弾が、計画通り爆撃中心点の中央国民学校に落下したか否かは不明で、東方にかなりずれたとも考えられる。聞き取り調査では、市街地の中央部から東部にかけての地域が最も大きな被害を受け、焼夷弾



写真2/宇都宮市中心部を撮影したリトモザイク(国立国会図書館憲政資料室蔵、原所蔵:米国立公文書館)

人体への直撃弾による死亡をもたらした。市民の多くは炎に焼かれ、煙に巻かれ、直撃に倒れて死傷していったのである。
爆撃時、B-29の飛んだ宇都宮上空の高度は米軍の報告では、4,054(4,450メートル)とされている。しかし、実際にはさらに低い高度から焼夷弾を投下した機があったと考えられる。B-29の飛ぶ姿を目撃したという市民の証言があるからである。しかし、米軍の報告では空襲時、宇都宮上空が悪天候のため、密雲をついて、105機がレーダーを使用した爆撃を行ったとされている。わずかに4機が地上を目視して焼夷弾を投下したに過ぎず、他の機は推測した位置を攻撃したのである。

爆撃中心点の位置

空襲の際、最初に目標上空に到着した爆撃機が初弾を投下して、火災を発生させるべき地点を、米軍資料は「爆撃中心点」と呼んだ。目標地域の中心にその地点は設定された。

空襲直前の5月8日に米軍が作成した「リトモザイク」と呼ばれる座標軸の入った写真2から分析すると、宇都宮の爆撃中心点は、宇都宮市立中央国民学校(現・中央小学校)であることがわかる。いうまでもなく当時、宇都宮市街地の中心にあたる位置である。聞き取り調査では、「中島飛行機や陸軍施設を狙ったものが誤って市街地に落ちた」と考えておられた方が大勢あったが、これは誤りである。もともと市街地の焼失を狙ったものであり、生産力